

## 足利幕府と琉球国との通交

虎 頭 民 雄

足利幕府と琉球国との通交の始まりは応永二十一年（一四一四）

と考えられ、以後何回かにわたり彼我の間に交渉が行われたのであるが、この日本と琉球との関係を述べるに先立つて、室町時代初期における日本と南海諸国との関係をみてみたい。

「高麗史」によれば元中五年（一三八八）暹羅国の船がわが国に來たというが、惜しいことにはわが国の文献にはこれに該当するものが見当らない。<sup>(1)</sup>

（1）「高麗史」卷之四十六恭讓王辛未三年（元中八年）秋七月戊子暹羅斛國遣奈工等八人來獻土物……王引見勞之對曰戊辰年（元中五年）受命發船至日本留一年今日至貴國得見殿下……

わが国に存する最初の文献は応永十五年（一四〇八）六月二十二日南蕃船が若狭國に來り、生象一疋・山馬一隻・孔雀二対・鸚鵡二対等をもたらしたという「若狭國稅所今富名領主代々次第」である。この若狭國に來着した南蕃船はその後応永十九年（一四二二）にも二艘着岸し、又翌年にも京都に進貢したと思われる

が、以後は若狭への來着は絶えたものらしい。<sup>(2)</sup>

（2）「若狭國稅所今富名領主代々次第」（群書類從卷五十）

一、一色修理大夫滿範

同（應永）十五年六月廿二日、南蕃船着岸、帝王御名亞烈進卿、番使々臣、問丸本阿、彼帝より日本國王への進物等生象一疋黒、山馬一隻、孔雀二対、鸚鵡二対、其外色々、彼船同十一月十八日大風に中湊浜へ打上られて破損之間、同十六年に船新造、同十月一日出浜ありて渡唐了。

一、一色五郎御曹司義範

同十九年六月廿一日、南蕃船二艘着岸有之、宿は問丸本阿彌、同八月廿九日に当津出了、御所進物注文有之。

同二十年三月己丑小浜着岸之鉄船之公事、自内裏可有御直納之由依武家被仰出之、当御管領細川右京大夫殿御教書、應永十九年十二月三日被成一色殿了。

同二十年三月日当所被仰下了。

この南蕃船が若狭國に來着したのは單なる漂着とは思われず、

地理的条件から判断して偶然とは考えられない。この時の南蕃が何処であつたかについて新村博士は、「帝王御名垂烈進卿」によつて「スマトラ島の東南部に位した三仏斉国の後である旧港（今日のバレンバン）ではないか」とされている。（新村博士「足利時代における日本と南国との関係」芸文六ノ一、七八頁―八一頁）

（3）「歴代宝案」卷之四十三山南王併懷機文書によれば琉球國王相懷機端肅奉書（宣徳三年十月五日）

旧港管事官閣下自永樂十九年（一四二一）間准日本國九州官源道鎮送到旧港施主烈智孫差來那弗答鄧子昌等二十余名到國告乞遞送回國……とあり應永十九年以後にも旧港の船が日本に來たことが分る。この文書は日本恐らくは博多に來た旧港の使臣那弗答鄧子昌ら二十余名を九州探題澁川滿賴が琉球に送り更に本國へ轉送したことを示している。

南蕃人が個人として日本に來ることはあつたかもしれないが、

「允澎入唐記」景泰四年（一四五三）十月十三日の条に彼らが幕府の使節として明に赴いた際「南蛮瓜哇國人百余人在館、求通信於日本」とあるが、藤田元春氏はこれを「その親族知己のあるもので日本に來ているものが多くそこで通信を求めたと解したならば」（同氏「日支交通の研究」一五一頁）と云われているが、これはやはり通好の意味と解すべきであろう。

（4）「善隣國寶記」卷之中、永樂十七年七月十三日大明書に「就帶進貢番人一十六名同先來八名重來」とある。

しかし日本と南海諸国との交渉がほとんどなかつたのにもかかわらず、足利幕府から明國への貿易品の中にこれらの国の物産即

ち蘇木・胡椒・沈香などがあつたことはいかに解すべきであろうか。こゝに日本と琉球との關係をみる必要が生じてくるのである。

小葉田淳氏の考証によれば「琉球使船の來朝は義政の代文正元年まで大凡二十三年間に六度、三・四年毎に一回の割であつた」という。（同氏「足利時代琉球との政治的經濟的關係について」史學雜誌四八の二）もつとも義政の代に六度というが、文献に明らかなのは四回である。<sup>(5)</sup>

（5）「斎藤親基日記」文正元年七月廿八日の條に「同日琉球人參洛、当御代六ヶ度目、号長史、於御寢殿前三人懸御目了……」とある。

ともかく応仁の乱以前においては琉球國の來朝は頻繁であり、滿濟准后日記・康富記・蔭涼軒日録などに琉球に関する記事がみえている。今応仁の乱以前における琉球使節の來朝年度を示す次の如くなる。

回	年	次	出典
1	應永二十一年	一四一四	「運歩色葉集」應永廿一年十二月廿五日付義持書
2	永享三年	一四三一	「滿濟准后日記」永享三年八月十二日、十月廿七日
3	永享五年	一四三三	「滿濟准后日記」永享五年八月廿九日

4	永享八年	一四三六	「御内書引付」永享八年九月十五日付義教書
5	永享十一年	一四三九	「御内書引付」永享十一年三月七日付義教書
6	宝徳元年	一四四九	「康富記」宝徳元年八月廿六日
7	宝徳三年	一四五一	「康富記」宝徳三年八月十三日
8	長祿二年	一四五八	「大乘院寺社雜事記」長祿二年九月廿九日、 「蔭涼軒日録」長祿二年十二月十四日
9	文正元年	一四六六	「蔭涼軒日録」文正元年七月廿八日・八月一・四・五・六・七・十四日

琉球船の来朝は応永十年（一四〇三）六浦に漂流船が来たのを始めとし、やがて義持より尚巴志王への復書となり以後両国の交易が始まり、琉球船は南海の物産を船載して来りその豊富な貨物は海賊襲撃の対象となるほどであつた。

（6）「南方紀傳」坤（應永十年）琉球舟六浦流來、船中有音楽声云々、

「鎌倉大日記」（應永）十年癸未琉球國船六浦流來、六浦は武藏國金沢附近、

（7）「老松堂日本行錄」其輩曰朝鮮舩則本無錢物、彼後來瑠求舩多載宝物、若其舩來則奪取也、

彼らのもたらしたものが沈香・段子・縹子などであつたことは満濟准后日記に見えるところであり、大体段子・縹子は一端五貫文、沈香は一斤上のものは一貫文、下のは五百文をもつて取引きされていたようである。又琉球国の商人が京に着いた時薬種及び料足一千貫文を幕府に進上するのが例であつたらしい。

（8）「満濟准后日記」永享三年十月廿七日及び永享五年八月

廿九日、

（9）「康富記」宝徳元年八月廿六日

「大乘院寺社雜事記」長祿二年九月廿九日、

宝徳三年（一四五一）七月末に琉球商人が来朝し兵庫に着岸したところ、守護細川勝元はその貨物を抑留し、しかも先々年（宝徳元年）の貨物の代金の未払が四五千貫文に及んで島人困却して幕府に訴えたので、幕府から布施下野守ら奉行三人を遣わして調査させたことがあり、もし事実とすれば誠に「希代之所行」と云うべきである。

（10）「康富記」宝徳三年八月十三日

小葉田氏は「或る種の商品を選定し押留してこれを戻さなかつたというが事実らしく、これは琉球船の商賈物を幕府が点検せしめて予め注進せる目録以外のものがあれば成敗するという制規に關係ある行動」と解していらるが、（同氏「足利時代琉球との経済的及び政治的関係について」）むしろこのような制規を悪用して言を左右に託して料足を支払わず、貨物を抑留したのではないかと思われる。或は又宝徳三年に遣明船が出帆している事実より考えて、（允澎入唐記）宝徳元年及び三年に琉球船のもたら

した貨物が歓迎されたであろうが、その代金をまだ回収するに至らなかつたのかもしれない。而して永享六年（一四三四）の遣明船の時の蘇方木は「自御倉出」<sup>(11)</sup>とあるから、琉球船のもたらした貨物はある場所に（恐らく京都か兵庫かであろう）蓄積され必要に応じて出されたものであるう。

（11）「戊子入明記」

又これら琉球使節の来朝は中国の事情をわが国に紹介することとなつたと思われ、長祿二年（一四五八）八月に来朝した島人によつて、英宗重祚及び年号改元のことが伝えられ、ために寛正六年（一四六五）の瑞溪周鳳製する所の遣大明書に「白日西照再中以発皇明」<sup>(12)</sup>とあり、高麗より回る商船によつて明の事情を知つたと云うが、琉球使者の言も与つて力のあつたことと思われる。

（12）「善隣國宝記」卷之中

文正元年（一四六六）には芥隱西堂を正使とする琉球使節の一行が来朝したが、これ偏に將軍の威力の然らしむる所であるとし、蔭涼軒主集証は南蕃酒の風味を楽しんでいる。<sup>(13)</sup>

（13）「蔭涼軒日録」文正元年七月廿八日、八月一日、四日、五日、六日、七日、十四日、

（14）「蔭涼軒日録」文政元年八月一日、  
この時琉球球国貢船点検のことが問題となり、

「就琉球入貢点検之事、大概一日諭其点検、公方様被恵彼者而頻々有往来則可乎、然則彼者、以内点検入雇人細、以註文可献之、若此外有漏泄之物則堅可有御成敗之由、以証状可申也、又其内有御用物、則可被召云々」<sup>(15)</sup>

とのことであつたが、結局幕府で買上げた以外の物は自由に貿易させることになり、毎年入朝之策をもつて宥恕されたという。<sup>(16)</sup>これらによつて琉球の貨物が相当多く日本にもたらされ、かつわが国において琉球の入貢を歓迎していたことがわかつて思う。

（15）「蔭涼軒日録」文正元年八月六日

（16）「同」文正元年八月七日

（17）「同」文正元年八月十四日

ところが応仁の乱を境として琉球使節の上落は極めて稀となり、沈香・胡椒・蘇木などの南海物産の欠乏を来たすこととなり、これを補うために今度は積極的に日本から琉球に進出することになつた。

琉球に渡航した商人は堺・博多の商人であつたが、博多の場合は朝鮮と琉球との通交の仲継地として貿易の繁栄をみたのである。そしてその地理的条件からして島津氏の領海を経由しなくてもよかつたのである。これに反して堺商人の場合は島津氏存在を無視しては琉球渡航は不可能であつた。

「島津国史」によれば嘉吉元年（一四四一）四月幕府は島津氏が義教の弟尊宥（義昭）を殺害したことを賞して琉球国を与えたというが、これは琉球自身は全然関知しないところであつて、思うに琉球貿易に関する何らかの特権を島津氏に与えたものではなからうか。

さて応仁の乱以後堺商人が陸續として琉球に至り、ために文明三年（一四七一）幕府はその取締りのため五代筑前守を通じて、島津氏に琉球渡海船のうち幕府の許可の印判のないものは帰らし

め、その積載の錢を抑留し京に進上すべきことを命ずるに至つた。<sup>(18)</sup>

(18) 「薩藩旧記雜錄」前集廿八

雖不珍候、鶯籠一自屋形被進候、仍琉球渡海船事、從堺迎近年無盡期候哉、所詮向後者於無此印判之船者、追御もとしあるべく候、就中彼船に有積錢事被取留、御京上候者悦喜可申候由懇可申旨候、巨細猶五代筑前守方可被披露申候、恐々謹言

(文明三年)十一月五日

左衛門尉行頼(花押)

謹上 島津殿

それ故文明八年(一四七六)の遣明船派遣に先立つて「泉州小島林太郎左衛門尉・堺湯川宣阿・小島三郎左衛門尉」らを琉球に遣わすに当つて島津氏の諒解を求めたのである。<sup>(19)</sup>

(19) 「薩藩旧記雜錄」後集廿八

琉球國渡海船事、先度被成奉書之處、御請到來、殊上使取龍首座言上之趣、具以被聞食畢、所詮於子細者、追被糺明之、堅可有御成敗、至泉州小島林太郎左衛門尉・堺湯川宣阿・小島三郎左衛門尉船等者、就渡唐被仰付已上者、以別儀嚴密加下知、無其煩可被全彼渡海之由所被仰下也、仍執達如件

文明六年九月廿一日

加賀守(花押)

大和守(花押)

島津又三部殿

三浦博士はこれら三商人の琉球渡航に政治的意味があるとされた<sup>(20)</sup>、すなわちこれよりさき寛正六年(一四六五)の遣明船の帰朝

に当つて成化の勘合符は大内氏の抑留するところとなり、文明八年(一四七六)の遣明船派遣に当つてこれを明に并疎するために文明六年(一四七四)九月土官性春を朝鮮に遣わし成化の勘合符は賊の奪うところとなつてゐる故、景泰の旧勘合符を携えて行く旨を明に通達することを願つたが、朝鮮は寛正六年の貿易においてわが国の通交のことすでに伝達した故その必要はないと拒絶したのである。<sup>(21)</sup>それ故琉球渡航のことは朝鮮に依頼したのと同じことを琉球に頼むためであらうとされたが、私は全然そのようなことはなかつたのであらうと思う。彼らの渡航は遣明の物資を集めるために外ならず、前に述べたようにこの時をもつて堺商人の活躍時代に入り、したも文明八年の時の三艘の遣明船は湯川宣阿の領掌するところであつたことは右の事実を裏書するものであるう。

(20) 「堺市史」第一卷、四七〇頁

(21) 「善隣國寶記」卷之中、文明六年九月日付遣朝鮮國書

(22) 「続善隣國寶記」成化十一年九月初朝鮮國書

わが商人の渡航が盛になつたのに反して、琉球使節の来朝は応仁の乱後における航海の危険をおそれたためであらうか拒絶するに至つた。幕府は文明十二年(一四八〇)二月布施下野守の奉書をもつて、世上静謐となれるにより先例に従い来貢させるよう島津氏をして琉球に伝達させることになつたが、<sup>(23)</sup>そのためであらうか文明十三年八月には琉球文船が貢物を船載して薩摩に至つた。<sup>(24)</sup>

(23) 「薩藩旧記雜錄」前集廿八

文明十二卯月廿九日到來上使安田方、自琉球國無音申之

儀、世上念劇之間者不及是非候、既靜謐之上者早々如先例御船可有來朝之旨、可被申遣之由、被成奉書候、被仰出之通急速御傳達候者可然存候、同此使者可罷上候時可遣御船之段肝要候、恐々謹言

(文明十二年)二月十一日 布施 下野守英基(花押)

謹上 島津陸奥守殿

就琉球國之時儀、去二月十一日之御奉書、同四月廿九日到來、謹以拜見仕候訖、抑彼船如先例可致來朝之由被成御奉書候、同御使渡海之上者敢不可有緩怠之儀候哉、於予私上意之趣速申遂候、無如在之儀候以此旨可有御披露候、恐々謹言

月 日

藤 原 武 久

謹上 飯尾前大和守殿

布施下野守殿

(24) 「島津國史」十二山室公

琉球文船至、文船者載貢物之船也、舳画青雀黃龍故以爲名しかし琉球使節上洛のことは応仁の乱以前と比べると著しくその回数を減じ、次の三回来京と推定されるにすぎない。

回	年	次	出	典
1	明應元年	一四九二	「蔭涼軒日録」明應元年十二月廿四日	
2	永正六年	一五〇九	「実隆公記」永正六年四月廿八日、廿九日	
3	大永七年	一五二七	「室町殿内書案」大永七年七月廿四日付遣琉球書	

しかし正式の国交は減じたとはいえ、商人は相変らず渡航したとみえ、永正五年(一五〇八)島津氏は前述の特権を再び琉球をして確認せしめ、永正十三年(一五一六)には琉球の使者がまた薩摩に至つて<sup>(26)</sup>いる。

(25) 「島津國史」十二山室公、永正五年三月十二日、蘭窓公遣

琉球王書曰王無恙、前遣天王寺東堂來修旧好、甚善、寡人は歲嗣位爰遣安國寺住持雪庭西堂告示因諭、自今以後此方商船至王國者、務要查点明白、儻有不帶寡人印証者收其貨物、暮春和照順時保重

(26) 「島津國史」十四興岳公、永正十三年冬十二月廿日、琉球

使建善寺僧某等來

堺商人が琉球からもたらした物貨は主として国内及び遣明船の需要にあてられ、博多商人が積載したのは対朝鮮貿易を主眼とするものであり、朝鮮は倭人不軌の難に苦しみながらもみずから対南海貿易の危険を犯すだけの勇氣はなく日本商人及び琉球国人の仲介によるの外はなかつた。

そしてこの間日本及び朝鮮に派遣された琉球国の使節のなかに日本の商人・僧侶があつた。例えば前出の芥隱西堂又は朝鮮に使用した道安・友中・徳源・同照東渾・敬宗らはみなこの例であり、成化六年(一四七〇)四月一日付の琉球国の朝鮮への国書に「新右衛門尉平義重」の名がみえるが、これらはみなその間の消息を物語るものであろう。

(27) 秋山謙藏氏「李氏朝鮮と琉球との通交」史学雑誌四一ノ七

(28) 「歴代宝案」卷四十一、成化六年四月一日付遣朝鮮書

琉球からわが国にもたらされた物産は南海産のものが主であつたことは、沈香について「蔭涼軒日録」にしろすところは、

「沈香事者自百済国出者也、自百済来于琉球国、自琉球而大唐高麗日本江渡之者也」<sup>(29)</sup>

「沈香事者於大唐無之者、自高麗南蛮琉球、大唐江来者也」<sup>(30)</sup>

(29) 「蔭涼軒日録」延德二年十月五日

(30) 「同」延德四年七月廿八日

とあつて、沈香がすでに当時において琉球以外の国の産物であつたことを知つているが、その「百済国」「南蛮国」は一体どこを指していたのであろうか。そして朝鮮及び明以外の東洋諸国において日本の物産がどのような状態において取扱われていたかをみなければならなくなる。こゝに琉球国を仲介とした南海諸国の物産の交流状況が問題となつてくるわけである。<sup>(31)</sup>

(31) 琉球國と南海諸國との關係については拙稿「中世に於ける琉球國と南海諸國との通交」(「紀要」第四号所載)を参照せられたし。

(終り)